

春城隨筆

昭和三年三月下旬起筆

四

特別
14
1919
401



176686

春城随筆

昭和三年三月二十五日起筆



○近頃漸く西洋の風を倣ふる花虫票を以て
考ふるものあり、その偶々坊間にて歎ふと見れば
又これ程を嬉ぶ、敢て自らを其の考ふる

ものあり、所収推稿の一端
として、二頁一を収め置く
耳

○碎後柏如亭の木工集を後必二三行を録す

晚日景

彩霞西抹尋詩之堤草綠多思雨臥
得王好水何去昌平榜上受輕輿

自遣

曾在昏醉夢間醒來始有此心測此心閑
雲暈直隱不至次離廬向碧山

早秋病起呈存翁

為瓜思雨一涼新秋氣呼醒伏枕人
情時拋書羅州起城中好新遊近江塵

訪文逸

枕无三月赴暮啼不訪松花訪柳柳風送潮頭

波樣樣夕陽梅在梅老西

呈北山先生

鐵肝石膽去君知何處世間輕為父
無奈詩魔坊書志逢人愧問去原初

美矣

美矣江湖衰志思江湖社友句清新
風流到底孔官事少詩人半野人

○日本のやうな鮮魚を指身をもむ心うすまて合て了そ
無ころうぬよりの山葵がある。山葵の魚毒を解くと
云いんておふまんのハどうあらうとも、魚肉の味を添へるあ
ハ、此種物がある。辛味の内々丸の方、雅々よりの山葵び

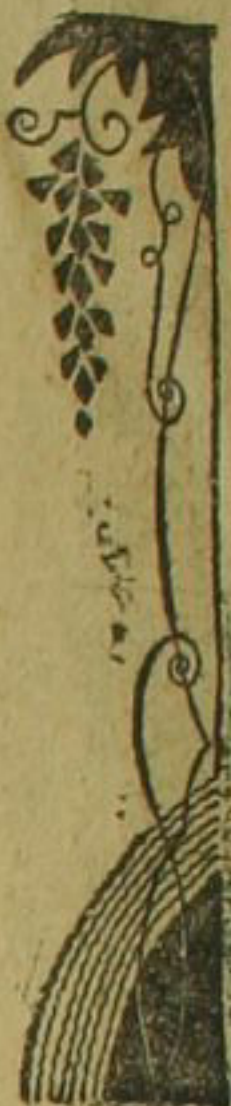
山葵ハ刺身や鮓ハ添りの香辛料として添へらるゝ
はかりにしろゝ、**薑**之れを嗜む人の根を磨りおろし
とろを嘗め酒の下物とするよふある。私の幼
少の頃郷里の無為心寺といふ、**湯**の傍にあつて、毎夜
深更まで讀むに耽つた。此傍に酒をぬんむ、**口**杯を
傾けらるゝ書牘に、**親**んじや、其下物に**山葵**であつ
た。植木鉢に清浄の砂を盛るつて、**ま**ん、**山葵**の根
を埋めおき、**陶**製の己さむおろしを机案の上
に置き、少量おろし、**地**を、**山葵**の根を、**鉢**
に備へするを、**湯**習とて、**寺**時四食の**山葵**の**鉢**
とてんじよのむある。葉をさむの調理するに多く田
舎む、**知**らるゝつたが、**江**にから来た料理人が、**穀**

の蒲焼ハ葉をさむを炙り味をつけたよふと添く
たのを喫してよひ、**工**心だと感したこともあつたが、**山葵**
の昔居し、**北**京を見たり、**餘**程の後年である。
燕海に**山葵**谷といふ所がある。今、**衛**成帝侯が設け
其の谷をいつか亡むたが、**毎**年の散葉、**北**の谷の
あつてを、**山葵**の**親**んじや、**北**の**穀**の**格**別
有らう、**新**の**カ**の**つ**たが、**お**側、**高**村が、**若**樹、**山**
と日光を、**産**き、**附**近、**至**清、**清**水が、**北**の**谷**に
流んこむ、**谷**の**小**礫が、**床**を、**手**を、**傾**斜が、**あ**
る、**山**の**断**るゝが、**通**過、**一**村、**北**に、**七**停、**清**
る、**山**の**断**るゝが、**山**葵、**お**花、**山**の**断**るゝが、**あ**
る、**山**の**断**るゝが、**山**葵、**お**花、**山**の**断**るゝが、**あ**

川葉の多い風致もあるものか、その培養地が上叙の
ことと係属し、汚濁が通つて汚穢を井戸の
まわりの、其境も趣味がある、肥料を用へて培
養するものも清潔の感あり。北谷まわりの蟹
がおり、そのか赤一種の風致を添へる。まわりの
まわりの蟹の風致冬は喜ぶものもある。まわりの
らひよを好んぶ食ふといふもの、法名に風俗の
多岐の風俗冬は喜ぶ味を同にすると考え、其
れこそあるものが、その家、まへて見ると久しく信を
んじ解き、そのまわりの全く空虚、早葵の根をま
するもの、別な小虫であることが、おかし、今、解き
の突か雪か、解き、断る、動く、汚濁のものを

を、人びと、その遊人びと、その外、その
の肥料を要するものと久しく、そのまわりの、
切ると、その家の、そのまわりの、
か肥料として要するもの、
のまわりの、まわりの肥料、そのまわりの、
培養するもの、
そのまわりの、そのまわりの、

●山葵、そのまわりの、そのまわりの、
培養するもの、
のまわりの、そのまわりの、
そのまわりの、そのまわりの、
そのまわりの、そのまわりの、



相好美の考察

日蓮主義美術の一補遺問題 河野桐谷

日蓮主義の美術は未開の原野である。自分は、自分の貧弱なる研究を...

- 三十二相 (1) 足安平相 (2) 千輪相...

- 八十九種好 (1) 頂上見ルコト無キ相 (2) 鼻高孔ニシテ孔現レズ...

- 八十種好 (1) 頂上見ルコト無キ相 (2) 鼻高孔ニシテ孔現レズ...

- 八十種好 (1) 頂上見ルコト無キ相 (2) 鼻高孔ニシテ孔現レズ...

質の美 (1) 質の美 (2) 質の美 (3) 質の美...

質の美 (1) 質の美 (2) 質の美 (3) 質の美...

質の美 (1) 質の美 (2) 質の美 (3) 質の美...

Handwritten vertical text on the right margin, likely a note or commentary.



○いかにも名の塚も大改の動物園も林仙市と
いふであらう。此の動物園も其の園係から
動物が死ぬると其の肉を食ふ積金が生ずるの
目録いづくの事を誠心でいふ事もある。公衆に
といふ大改の動物園：此人又が考へてある事
見ると、程程に二つある事といふ、五米田の屋
が死ぬれば死ぬれば食ふべしとある、一片の肉が
七十四圓の値を高くする、おいてある、百道楽の
一材料といふは記すをよむ。

○諺：家の善法をすると主が死すといふてあ
る。墓を終めると主が死すといふ、自分此の
二のを近年はよく見か、御葬中を操りけは不支

の感もある。或る人之れを解して家を建てる墓
を理したる事、此の諺は、晩年の仕事であるから
此事が敢て不祥といふ事、むむと、白木蓮
を植へれば主が死すといふ諺、初めを聴いた人
もある人の解する、ある花を愛するの、老人
が受けの、ある女とある、自分の園内も白木
蓮があるといふ花を愛するといふ事。

○自分の晩年時代の義山と其の奥の法山
を改葬した、事もあるが、白雲金洞金鷲の
山名、果ありといふを指すやと知らざる、うら
らに記行を、作者も随筆に、死ぬるとする、方り、
市時の記行を出して、一談を記す、其の義山

七ん飲心購入る、此物中川柳外の意付ころ、
 尺二寸幅ハ寸ばかりの紙本不歌うる各七絶二
 首を録し、一幅は正清の意款あり、他の一幅
 二冊に金山二首 程郷宋湘の意款あり
 印は大吏氏とあり、此人の係未だ詳みざるを
 とおらざるをあると云ふ、書体頗る昔昔
 肉に似て、豪放の味拙すぎ、表装云々の
 二幅を収めたる、紫檀木製の二冊あり、金目裏
 き、柳外珠花の香る名の詩書ハ絶二幅を
 購ひ、これと併せて此とすべし 三月廿六日

の織造の驛名を二冊毎名に左者すること、定
 まるたのを新織目おの新任ぬに右者す
 くと官報を各驛に寄るといふ七珠あり
 ず、まゐつきし 田端の驛あり、こゝららと

どうもよひ、左右何んや、右ははれと
 漢めるといふたのふ六珠あり、左右右者
 が混流しとみるのも、美に困りしものがある。
 とおすとめま直さしをせしする、例ハハ
 高寺下宿と構者しとある標榜の如
 き左から後ちと前か下等ハ高いとま
 づ。

體雄奇之既采、詩石破、後、從真性何全
涌而出、自成一家、若有不易、是百集、豐湖
漫草、其甚、漢、歸、法、集、

北の人の侍、四朝、正事、既、詩人、微暇、山、鎮、南
詩、抄、其、尋、ふ、あ、り、

○偶々、津波、在、湯、の、夜、航、船、説、を、後、志、白、楽、天、の
大、路、り、あ、り、從、こ、る、を、言、こ、し、て、何、と、論、じ、一、例、と
し、て、大、輝、の、待、と、奉、じ、

宅院、小、幡、扉、坊、門、帖、障、屏、連、意、思、漸、自
高、前、事、海、難、追、龍、島、無、常、王、瓜、花
不、恋、枝、今、宵、在、何、處、唯、有、月、的、知
寵、婢、心、心、を、恨、古、意、々、の、一、概、態、殺、今、自、象

を極、人、柄、を、傷、く、る、こ、と、有、り、又、或、る、人、の、花、を、偷
ま、り、の、り、を、奉、じ、

誰、家、花、爛、漫、忽、動、花、偷、情、願、野、説
人、主、躊、躇、改、ま、り、攀、来、教、る、右、條、折
去、愆、流、若、捷、歩、將、帰、家、小、雀、難、心、吟
偷、火、の、情、態、を、お、し、し、と、云、く、も、作者、の、人、情、を、実
する、こ、と、云、し、花、を、偷、ま、り、の、り、を、奉、じ、と、い、ふ、云、へ、
此、花、の、り、の、心、を、お、し、し、と、云、く、も、の、也、

○地名、の、似、を、忌、む、或、は、之、の、を、ぬ、人、が、変、更、す、る、は、ま、り、し
か、ら、ず、寛、永、体、名、を、お、し、し、と、云、く、も、例、ハ、愛
宕、山、を、忍、必、山、船、岡、を、深、見、島、高、原、を、配、野、峯
牛、生、崎、を、荒、夫、洲、品、川、を、勝、耶、河、と、し、四、府、を

を清とすとの類と推し復んとして印りて
 似こ陥つと夜航故流とあり又曰者續日本紀
 和銅六年詔以畿内七道郡名在葛城字とあり
 延喜式凡在四郡内郡里莽名并用二字必
 取嘉名とあり是と因て文字を擇り其名如し一
 定せしるふへし近世諸侯の四府心無下郡陋る
 名ハ茅田と云き祿と改る例あり、遠州濱松引向
 と云けるを東照神皇正統記と云て改て旧名復せ
 る。四州錦宮ハ大梵字と云けるを、最上義光
 美名に改る。熱海松改ハ四五百森と云ける、藤
 生氏ハ今の名に改る、坂前福井ハ北庄と稱せし
 を忠昌卿改て名を命て、金澤仙臺と云ける

美名に改らる。松州松改、四五百森と云ける。生氏心分の名に改らる。城前福井北庄と称せしと忠島卿改て名を會せらる。金津仙甚るる。石塔

市島會長へ贈呈記念書棚

一、時代青貝入大書棚

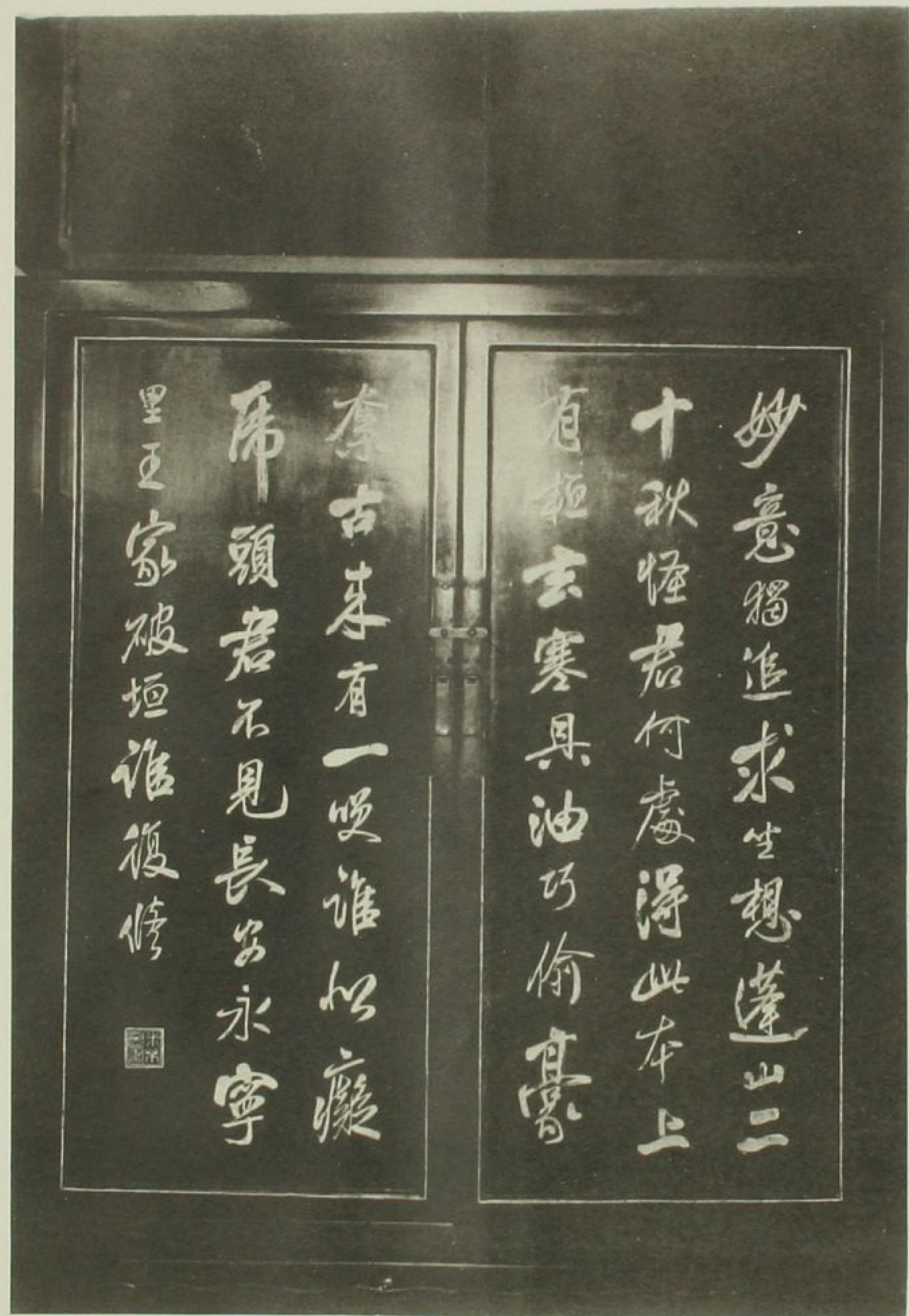
支那製

價格 金貳百七拾五圓



太古来有一喫誰似癡
頭君不見長安永寧
家破垣誰復修

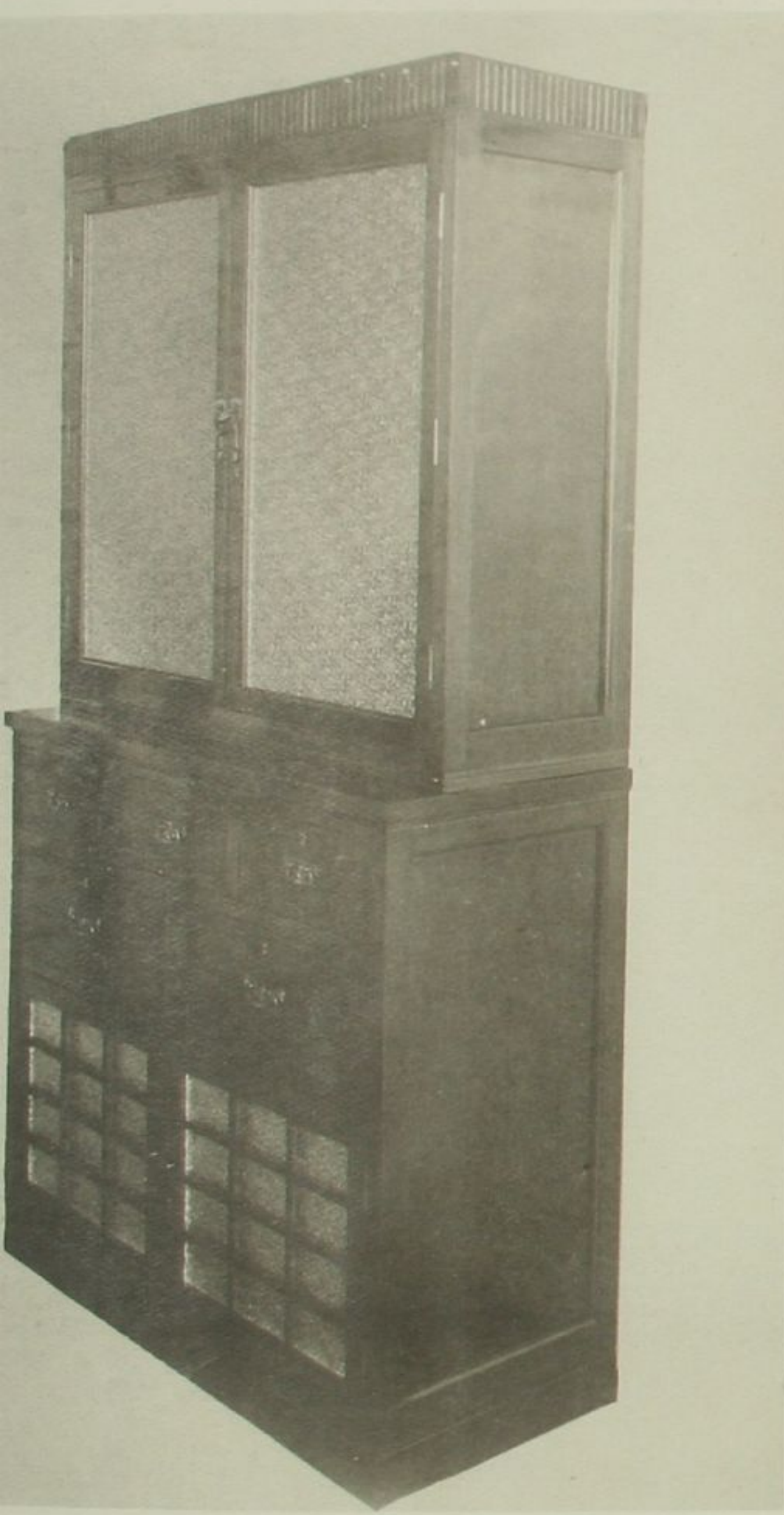
二、同屏

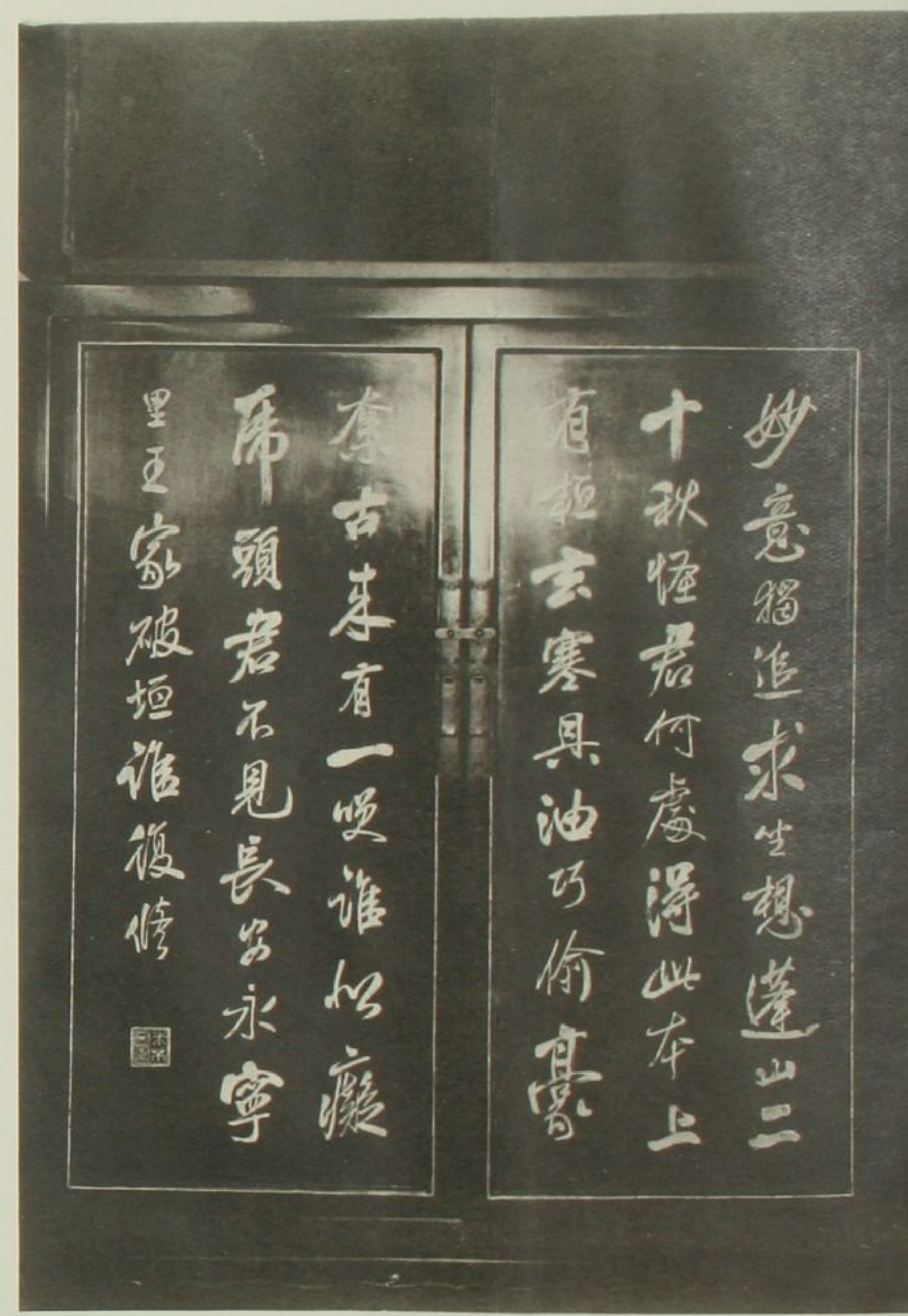


妙意獨追求生想蓬山二
千秋怪君何處得此本上
有極去寒具油巧偷真景
太古来有一喫誰似癡
席頭君不見長安永寧
里王家破垣誰復修

三、櫻製書棚

價格 金九拾五圓





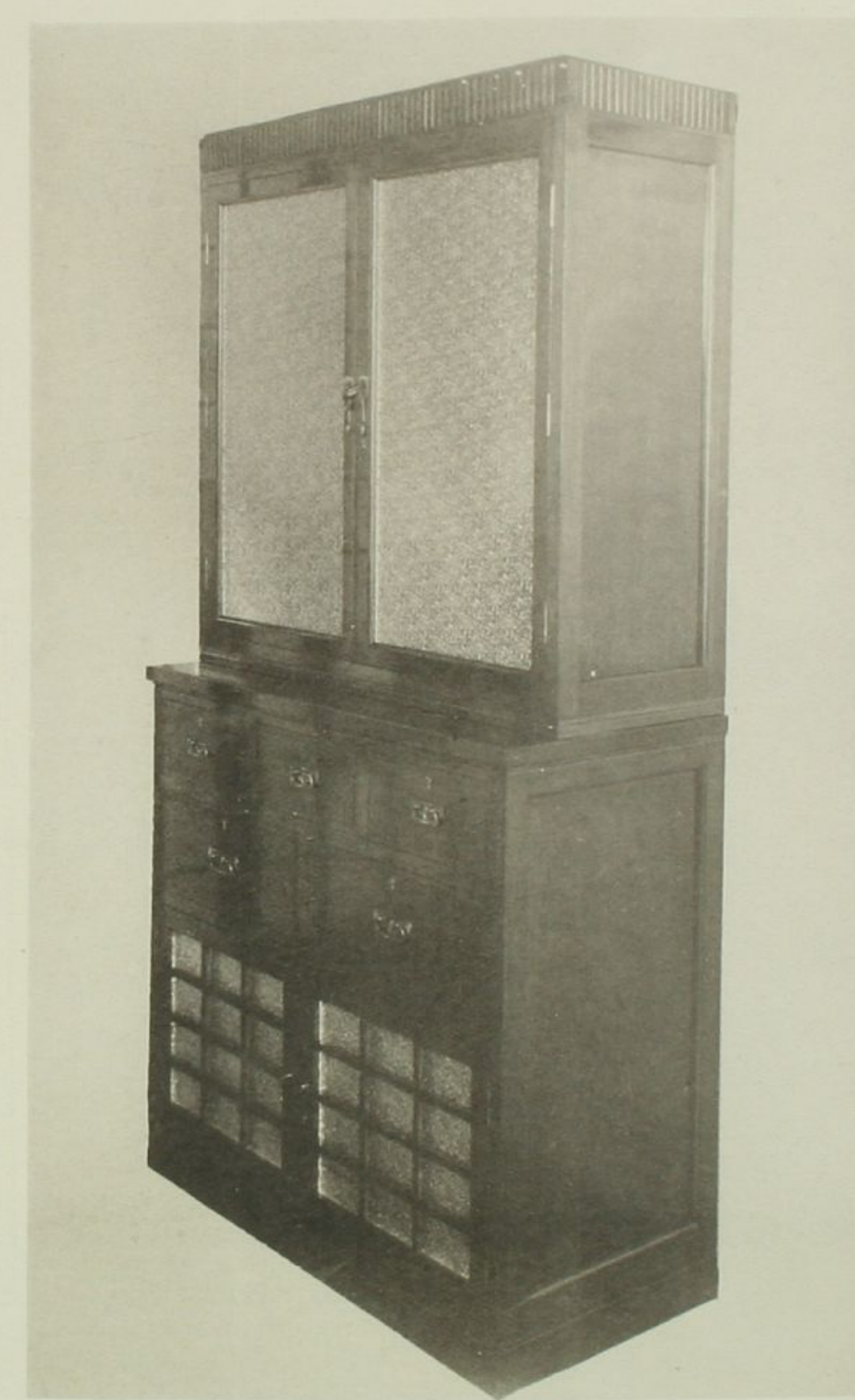
妙意獨追求
生想蓬山三
十秋怪君何處
得此本上
有極玄寒具
油可偷膏

套古來有一
咬誰似癡
席頭君不見
長安永寧
里王家破垣
誰復修



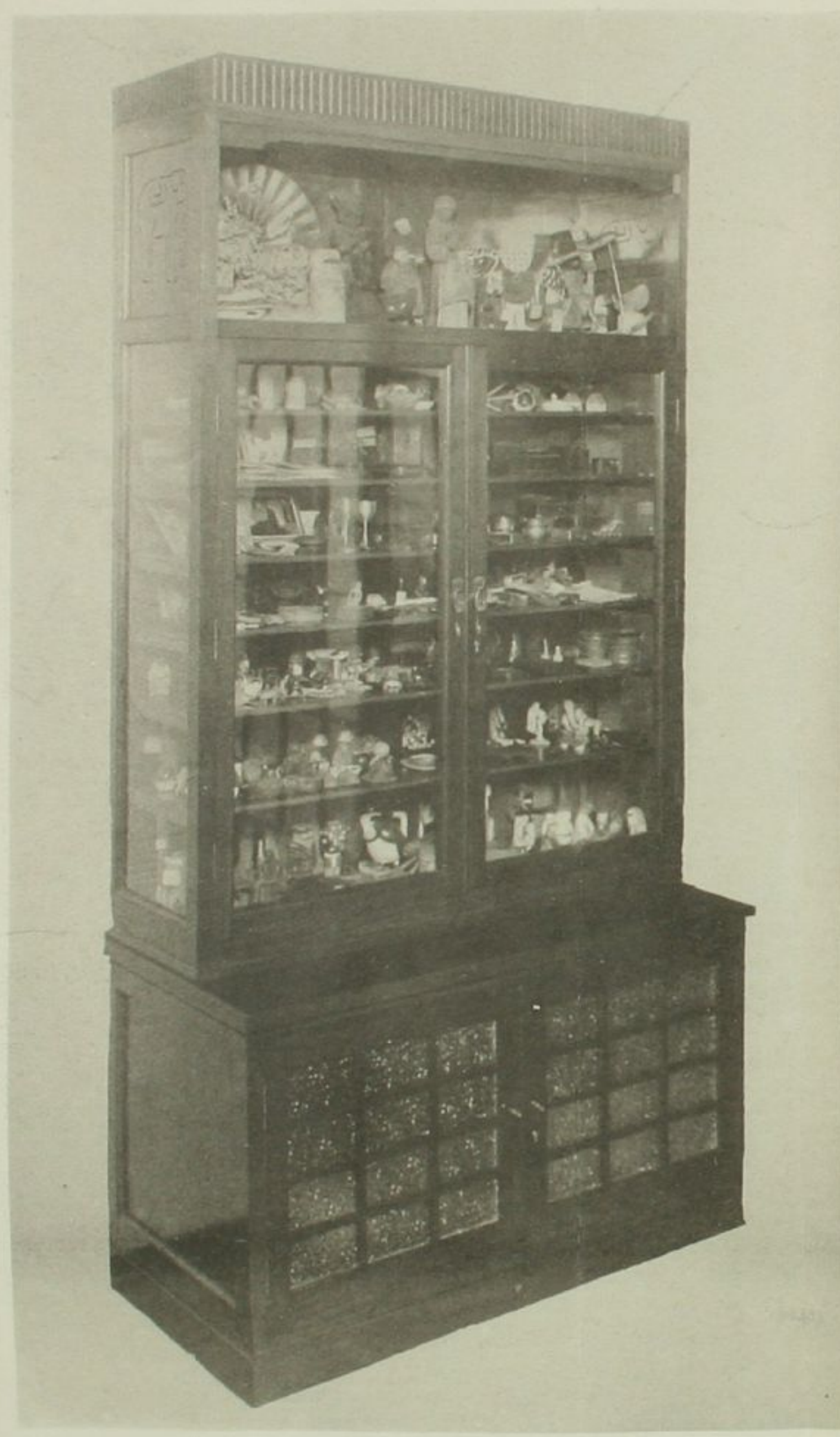
三、櫻製書棚

價格 金九拾五圓



四、櫻製書棚

價格 金八拾五圓



以上

此の命を以て美稱し一とあり名の推を
 此の命を以て漢めさるる字を用ゆる支那感に
 する。これより古名を失ふことの少からず。凡所の
 契と謂へるを得ぬ。

山田 隆治	飯塚 知信	上野 清彌	渡邊 清次郎	石黒 大次郎
會田 彰誠	渡邊 幾次郎	佐藤 辰衛	相馬 昌治	小林 久平
石川 文一	山田 鱗之助	内藤 久一郎	東條 義人	
佐藤 千毅	堀井 武雄	丸山 巖	近藤 喜八郎	坂口 上枝
小林 毅	昆田 強平	若月 義雄	矢部 武夫	以上

市島會長へ贈呈記念品寄附金決算書

收入

一金六百參拾參圓五拾錢

申込總額 (人員二百三十九名 別項參照)

內

金六百五圓五拾錢

金貳拾八圓

實收額 九名分

支出

一金五百八拾九圓七拾二錢

內

金四百五拾五圓

市島會長へ贈呈、書棚大小三個代(別紙圖面參照)

利息書、賀狀、決算書類印刷費

郵稅

準備會諸入費

雜費 (手傳謝禮、諸用品 記念寫真代等)

差引

金四拾參圓七拾八錢

內 金貳拾八圓

未收

再差引

金拾五圓七拾八錢

剩餘

寄附者名簿

金拾圓

反町 茂作

昆田 謙一

林 瑛

渡邊 伊三吉

石塚 三郎

石川 勝治

山田 隆治

會田 彰誠

石川 文一

藤山 茂彦

廣島 一郎

舟崎 仁一

佐藤 安平

今井 喜與志

角谷 勝次郎

高橋 治吉

吉田 清一

津野 武衛

若松 新二郎

村田 耕藏

坪谷 善四郎

古田島和太郎

松木 弘

川上 淳一郎

內藤 久寛

清水 泰治

山田 清作

飯塚 知信

渡邊 幾次郎

阪口 獻吉

梅澤 忠治

安倍 邦太郎

蒲原 俊磨

小川 健夫

笹川 加津恵

山岸 光宣

平田 重平

野本 篤助

平石 恒作

近藤 潤次郎

會津 八一

長谷川 誠也

小柴 卯之七

早大新中會

中野 鐵平

小林 堅三

上野 清彌

佐藤 辰衛

山田 鱗之助

今川 幸吉

清水 善雄

武石 弘三郎

原 達平

川上 貫一

志田 繁治

樋口 清策

櫻井 芳賢

吉本 正也

青山 松二郎

廣川 九郎

大江 乙亥門

廣井 一

齋藤 庫四郎

高井 忠夫

奧田 雲藏

野澤 卯市

渡邊 清次郎

相馬 昌治

內藤 久一郎

高橋 銳二

橫山 正藏

宮澤 喜運治

佐藤 博

石塚 一雄

小林 節治

山崎 勉治

大石 理圓

殖栗 悌二

五十嵐 幸次郎

關村 俊二

飯村 泰輔

關口 慎一

吉村 慎一

增田 義一

松井 郡治

石黒 大次郎

小林 久平

東條 義人

中野 巳三郎

丸山 和七

土田 潤

小松原 謙三

山中 平吉

酒井 清一郎

岡田 彌一郎

渥美 重雄

內山 義文

內山 昌二

金四拾參圓七拾八錢

內 金貳拾八圓

未 收

再差引

金拾五圓七拾八錢

剩 餘

寄附者名簿

金拾圓

反町 茂作

坪谷 善四郎

會津 八一

大江 乙亥門

關 太郎

昆田 謙一

古田島和太郎

長谷川 誠也

廣井 一

飯村 俊雄

林 瑛

松木 弘

小柴 卯之七

齋藤 庫四郎

關口 泰輔

渡邊 伊三吉

川上 淳一郎

早大新中會

高井 忠夫

吉村 慎一

石塚 三郎

内藤 久寛

中野 鐵平

野澤 卯市

松井 郡治

石川 隆治

飯塚 知信

上野 清彌

渡邊 清次郎

石黒 大次郎

會田 彰誠

渡邊 幾次郎

佐藤 辰衛

相馬 昌治

小林 久平

石川 文一

阪口 獻吉

山田 麟之助

内藤 久一郎

東條 義人

藤山 茂彦

梅澤 忠治

今川 幸吉

高橋 銳二

中野 巳三郎

廣島 一郎

安倍 邦太郎

武石 弘三郎

横山 正藏

丸山 和七

舟崎 仁一

蒲原 俊磨

原 達平

宮澤 喜運治

土田 潤

佐藤 安平

小川 健夫

川上 貫一

佐藤 博

小松原 謙三

今井 喜與志

笹川 加津恵

志田 繁治

石塚 一雄

山中 平吉

角谷 勝次郎

山岸 光宣

樋口 清策

小林 節治

酒井 清一郎

高橋 治吉

平田 重平

櫻井 芳賢

山崎 勉治

岡田 彌一郎

吉田 清一

野本 篤助

吉本 正也

大石 理圓

渥美 重雄

津野 武衛

平石 恒作

青山 松一郎

殖栗 悌二

内山 義文

若松 新二郎

近藤 潤次郎

廣川 九郎

五十嵐 幸次郎

内山 昌二

村田 耕藏

安達 義雄

陶山 寛

寺澤 靖

築取 常一

上野 喜永次

宮澤 武雄

清水 修策

安宅 善之介

兒玉 龍太郎

今井 宏二

齊藤 辰三

皆川 武雄

山岸 民四郎

本田 幸助

鹽谷 健次郎

大倉 久吾

伊藤 九郎太

小林 徳

澁川 俊坪

相村 正美

大瀧 泰治

片桐 和三郎

黒井 梧樓

田中 八穂平

酒井 求馬

高橋 芳平

田野 第五郎

黒井 梧樓

田中 八穂平

久保田 静一

高井 又次

加茂井 増太郎

高木 政俊

石添 直衛

多賀 博

武田 太吉

家田 三好

伊藤 新九郎

眞島 武

中村 孝夫

川鍋 久治

阿部 利三郎

長谷川 利三郎

長場 梯次

若林 鑑一

若狹 誠一

天野 治

川崎 信一

高木 淳藏

菅原 實

牛木 一男

黒川 秀男

今井 宇一郎

星野 史郎

玉垣 弘八郎

大塚 誠一

吉村 吉太郎

本間 榮太郎

島岡 六松

覺張 一郎

遠藤 利一

石川 淳次

富永 正信

永田 實

石田 穰

清水 政治

森田 稔

竹澤 信

東條 進

小林 信臣

大瀧 正勝

石松 英治

星野 三九馬

小島 寅次郎

倉橋 利雄

小出 信次

大塚 淳次

古川 辰治

矢澤 武雄

清水 徹二

本山 隆雄

入村 昌治

黒崎 城平

花田 秀雄

長谷川 三代介

岩崎 篤次

西條 勇

蟹澤 敏夫

中村 重康

西條 勇

井部 正

池田 謙次郎

長澤 喜代治

金子 重幸

入村 伍作

廣田 弘

宮腰 乾治

富田 精

山本 修平

仲川 勘兵衛

榎本 剛

金子 貞一

佐藤 七夫

本間 市郎

石塚 二十夫

佐々木 久雄

影山 七十郎

根津 憲三

瀬下 潔

長島 兼吉

村田 寛司

品田 茂之

吉浦 吉郎

立川 直行

長島 兼吉

片桐 和四

高橋 文雄

品田 久雄

阿部 良雄

時田 恕夫

村山 貫一

高橋 次郎

村山 公三

坂口 上枝

小熊 健吉

堀井 哲榮

丸山 彌一郎

近藤 喜八郎

以上

佐藤 千里

堀井 武雄

丸山 彌一郎

近藤 喜八郎

以上

小林 毅

昆田 強平

若月 義雄

矢部 武夫

以上

○秋夜の歌に云く、七言の句を必すの法にかゝるが
末二句を綴り起して、主言をここの中の人とあそぶ
二の句を起して、主言をここの中の人とあそぶ
み茂都の入る七言の句に、歌の塔をくまやうま
よまのし、塔をい上りて、くまの事、地盤をく
みあくるやうに、下の句より上の事、あつとあ
り、詩歌おもしろ、
年あまうと、こゝに初冬
に、教の事、あまの事、
と、いふこと、
と、いふこと、

○曰者云、例の世の事、花にせれいと、雨くちあ
ふかふ、此句を評せし、あまの事、人我の隔あつて
表地、いふこと、人あまの事、風止て、雨くちあ、
物、いふこと、

いへるまゝ、溫柔敦厚の方に入らひて、いと疎疎なる
善人と見えぬ、所雅の理ののりあるんば、あかく
七、カキことといふ、海かきす、花うりてのあ
らうもよふ、冬至梅」といひける、
カヤアアアと菊畑」といへる、
故あるまゝ、志外す、詩歌より此訣を忘るべ
し、
もそ、こゝろくることといひ出さるるをかし
〇又云、屏風あすまの法まを、たひを、
紙もとも、
何とせん、
于難ハ唐詩選に出さるるを、掛軸程聯

いへるまゝ、似をまゝ、
訓、古今語無推、似、
〇又云、白香山蘇物詩、浪浪東西南北水、紅欄
四百八十橋、直是我浪兼、
峴其望心、
人、
〇又云、鄭鶴鳩、
白、
〇又云、
冠、
隔、

一 冬...まこと夏...ましまし...表やと云ひにけり...
 一 春風七...花...
 一 鈴木...
 一 是即...
 一 三味...
 一 笛...
 一 志母の...
 一 松...
 一 龍門...

一 味無味...
 一 良田...
 一 アナク...
 一 又曰く...
 一 又曰く...
 一 又曰く...

右銘

一 又曰、我人墓中より歌る、人ら飲め、時方荒
 くして死か河を我人の如く寒冷即せしめたる
 前に飲め。
 一 古喃子曰、客はよりの閑をゆるんば、主は半
 日の閑をせよ。
 一 まゝのすい、珠の原に志らじかし、おろかな
 ることを嬉しかりけん 木下幸夕
 の前掲の文を更と増補せしむれば、隨筆にうら
 入るる物、トトトすつ子おしとこいよぬめおく

四月五

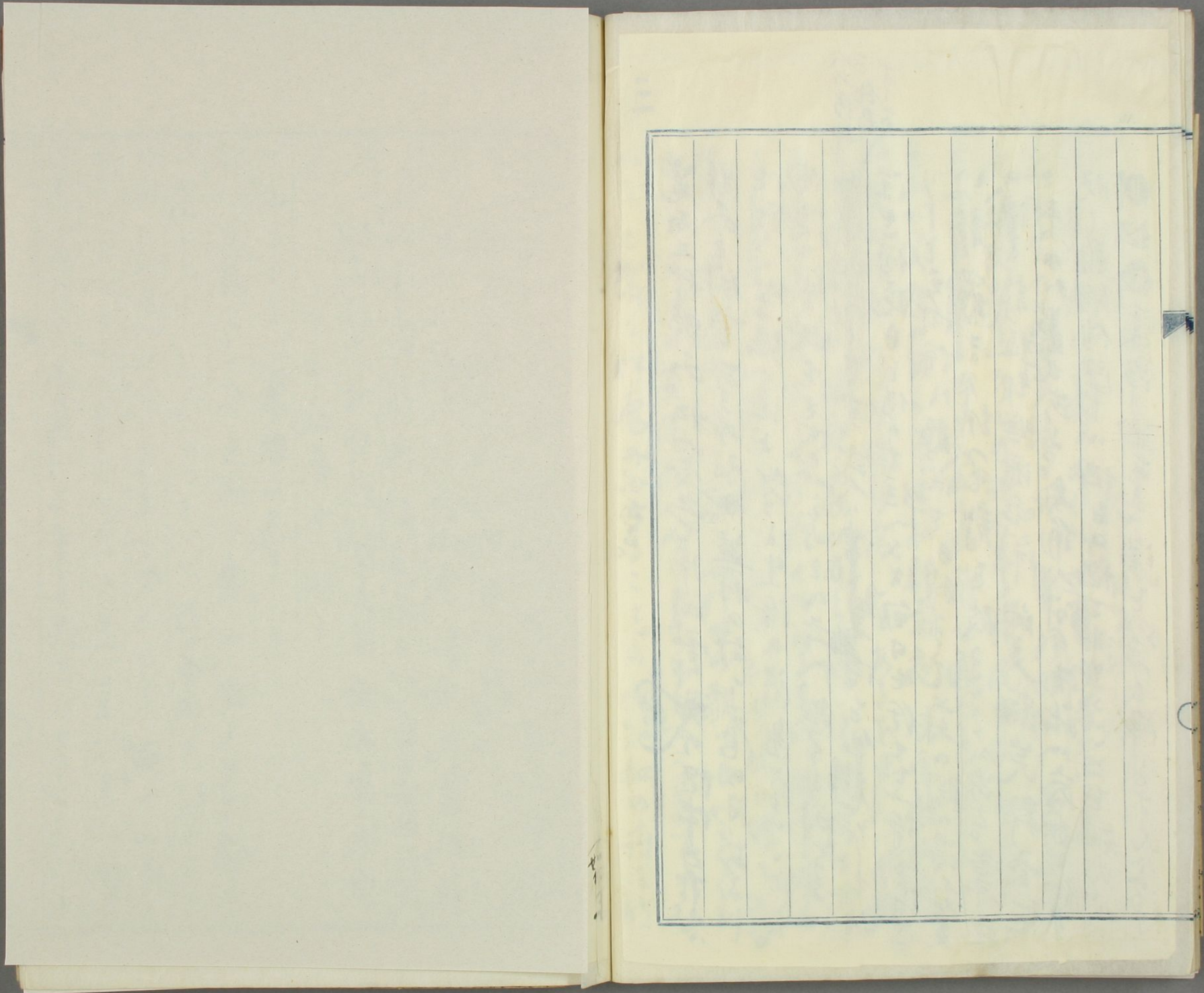
僧生活二種風趣の多きもの、随つて詩人ハ之んを好個
 の材料として寺觀や鐘聲等を背景を飾るの具として
 いる。野守山をこ斜經、傳家の裏半崩門と詠
 し、竹向ある山厨勢、塔下僧帰野殿空と
 詠へば、其寺斜雪後半潭烟、老衲眠多不
 語禪、欲識日暮鐘、且事三三、一厨中、破牛川山
 名、を詠してある。よあの縦横寺、あま寺の瓜
 皮の大切る原臺、てふ詩人の好材料である。野守山
 破牛橋、寺僧對奕、蒼苔はるか、童子笑茶、月、
 寺僧院の一光、あはれある。遠く寺を形容するもの鐘

鳥羽山月、松勢、松風、法鼓、野守山、
 林、に有山、僧院と云ひ共、僧院の状を詠つたの

う山雅を感す（或）古木無人迹 深山何處
 暮烟生 忽少鐘と詠し（或） 乃田村 山寺
 夜鐘沈むをいふの詩がある。僧院生活は生活者
 其の公定處にあり。進和郡市夜 凍雪封松井。
 時有山僧未 燈燭自宿 且とあるを見ん（或） 霜
 山僧の境遇に決して風雅にもあるまい。試を僧を
 して其生活の一端を語らば、僧貫休の詩、茶
 拾分り葉 茶煮滴 鳥と西行の歌、七言、く
 おつる岩間の苔法師のくみふらむをいふも、さ
 かると、雪の住居のわらうことよ、僧和の詩、竹

人の物神
 を鈍我
 する

寛面三升野み 松窓五七片閑雲、其の侶伴とす、
 野みと閑雲あるのみ、其村の句、一庵の月あるに
 を河の茅堀りほど、めづる生活の簡易なることよ。
 僧院の閑寂をまぶさよと云へ、餘り閑寂なるハ
 却つて閑寂なるも、或人ハ、其詩を、閑寂とて山
 深き僧院目を倚りて住へる、旬日を住て一詩も得せ
 り、と云ふ、併し、静閑を欲するも、其の閑寂は、
 い、静寂なり、却つて静を破ることがある。昔年在
 の、静極却姪流、閑多翻笑野雲忙、
 と云ふ、其詩、ある。尤角人間の本能に、容れ、解
 脱、難い。僧院、閑寂の、閑寂、此、閑寂、閑寂、
 閑寂、七言、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、
 閑寂、七言、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、浄、



○犬山城のあり木蘇川を日本一獨一のライオンと比し
日本ライオンと云ふししの謂のんらひことハ實地風景
に徴しを知の比かせと犬山城を白帝城と云ふこと
が果しと當つておふかどうか、白帝城と何んか
臨んで崖上と上の古城とあり、保しよる榎子
ハゆかむるい。杜牧の詩：

白帝城最高樓

城尖徑仄旌旄愁、獨立傑岬之形樓、峽
外雲雨龍虎臥、江清日抱元龜置、龍扶
業西枝對斷石、弱水東影隨長流、杖藜
歎世者誰子、泣血迸空回白頭。
とあり、首句二句ハ宛か犬山城を形容するが如き歎

かあり、三句四句山あり幽邃と形容するとの山に龍
舟似し河に元龜置龍扶と云ふ、詩あり山河の形
実よりサリし大なる思くうやうする人も神の秘を深
く看するあの境は敢て描まらぬいぢもさいやうな
思ふ。四句五句四圍の形勝と云ふハ勿論異るを
断石を云ふ士形の山と云ふは擬してその形を云ふ
よいもする。日本ライオンとの名を不可とする余ハ
白帝城の名を可と先ハ、峽外雲雨龍虎臥
の句ハ少くも日誦する所なる、何故犬
山城を探詩の時之れを想ひ起さるうつれい
あううかあの境に於て此詩を吟誦せん一層
感興を深からしめられたるべし。

〇二三連夜先杜の集を讀んじ思くこく、吾ん七緒こ
出のつと却め杜詩に枕藉す何んぞ甘んじ屏^き也
杜詩解し難きことの多く、荒輩撰^り難き也
然れども少壯好んじ吟誦するもの多し杜句より漫
書の杖とするもの亦概極杜句より邦人の詩を讀
んじ在るを受わること亦杜の詩に働かむこと
又過きず杜詩の感化を受くる既^にと云
ふべき歟、先杜の要路の人より殊に我軒を
と目人格のより閱歴者多し、其の^は若し
詩とする、梁武帝詩人の及み能いさることある蓋
し高祖の事、傷み、物んを彼ん^は唐代か生み
る希存の鬼才より、世及及替り^る詩界の之んを

宗とする故あるかる。吾輩杜詩を讀んじ快を
覚ゆるもの、言の氣の漲るもの、氣象の宏壯る
ものあり、慷慨の氣味を^ま溢るものあり、詞句渾勁
るものあり、波瀾飛動敬言句流出するものあり、殊
に起首突兀人と敬言のするものあり、結末亦^は非凡る
ものあり、毎句緊密含蓄あるものあり、^は字無きものあり、
物と字と、^は詩界都^に、感慨を叙するものあり、
陰りしも活潑なるものあり、丈夫的氣魄満るものあり、
渾沈博の^は丈夫的氣魄満るものあり、渾沈博の^は
筆を揮ふも、露骨を^は避けて、温^は藉の^は情を寓
し、一家の不平を漏れ^は志^は勤王^は在^るものあり、
及^はい^は難^しとするものあり。若し^は^は関鎖極の^は密^は
詩格也

幕府時代に非改に困み収斂に堪へず、身を授け
て反抗運動を起し、義民の事蹟は一月して是
とぬ、中にも休兵宗吾の頭、若原、~~丸~~丸が、是
ハ劇に脚色をさんとお陰や、実の家、宗吾、義
民、~~丸~~丸、許す、人格か、~~丸~~丸、あることか、~~丸~~丸、
吾、~~丸~~丸、城後、~~丸~~丸、~~丸~~丸、度、の、~~丸~~丸、
~~丸~~丸、世、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、
の、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、
皎潔、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、
の、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、

東京府立第一

○郷友上野喜永次北城義民傳を出版せんとし
余、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、義民、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、
あ、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、
~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、~~丸~~丸、
四月十五日

此の義本をいひて皆北一件の巻の間接に知り得れず
 此の義本は単に義民の事蹟を顕揚するに止まりしか、幕政の一斑を知るに好箇の史料とも謂く得ることある。

此の義本のあるに際し、今も義人と二百年の舊に属する。幸に舊記の存するものが多く、且か上り巻に依つて編者名を義本とす。其の面目を推し、義人の横行の世の中、隠れんば真義人の面目を推し、義人を推し、世に恨みをもつるハ、私の助る味とす。所は、聊に所徳を述べて巻頭を記す。

(品質非行發日時)



町田喬小 所京東市外市 所京東市外市 所京東市外市 所京東市外市

女の一生

『女の一生』と原作者

畑 耕 一

「すくなくとも『女の一生』は、モオパッサンの長篇中『一代男』ペラミイ」とともに、あはせ置まるべきものである。前者は清浄無垢な女性が、残忍冷酷な男性の、肉慾的誘惑によつて喘へげどもがけぞり出ることの可なは、運命の泥沼に陥る事實を、大膽に忌憚することなく描いたもの、後者は美貌を誇る男性が、思ふままに獸的態度を發揮して、しかも巧みにその社会的地位を高めてゆく事實を、精細に露骨に寫したものである。モオパッサンは自然主義を、極致にまで進めた作者である。彼は自然のあるがままを、絶対に客觀的に如實に描寫した。『よく見る』これがすべての彼の態度であつた。



彼は人間を『存在して』そして『行爲する』ものとだけ見た。情熱や理智や批判や——そんなものは彼には必要がなかつた。彼にはたゞ眼前の實在と事實があるのみであつた。なんの顧慮もな

かを描いた。彼は彼自身を『寫眞機ほごに精確な眼』をもつた作家だとした人間の持つ根本的な原始的な姿——それはこうして、彼に所謂精確な眼に映つたのである。そこには道徳とか社會制度とか、あらゆる人間の因襲や規範を脱した、一讀わが事ながらも眼を蔽ふばかりの、生々しい本性が如實に現はされる。この人間の獸性を凝視すること、彼は自ら『第二視力』だといつた。そしてこの恐ろしい視力をもつて彼は直ちに何等の運命もなく、戀愛即性慾の世界を、直裁な言葉であらわした。彼の眼が寫眞機なら彼の原稿紙は敏感な乾板でなければならなかつた。

『女の一生』に於ける彼の第二視力の働きは、實にすさまじい。結婚の夜の光景や、コルシカの旅館の一節など、平凡な道學者先生が讀んだら、呆然自

『女の一生』に就て

小 田 喬

原作『女の一生』は或る意味で云へば何處にもある事實である。そして道理である。女性はい、すべて女主人公ジャンヌなのである、世間の女性は結婚した時にジャンヌと同じ經驗を持つてあらうし

取れず... 北義本... 市民の事蹟を顕



春田武

不幸にしてジュリアンのやうな夫を持つた婦人はジャンヌと同じ苦しみにしむであらう。實に『女の一生』は不運な女性の一生の事柄と、その同情との記録である

白味もあるといふ、吾々の好んで観ふところのものであるがこれ等を除いては映畫にそのまゝ描寫し得るものは何物もないのである。若しそのまゝを映畫化したとしたならば恐らく意風なも

君がこれが脚色の任に當り、私が監修することにになりました。少くとも現在では——光榮の立場にあるわけが御座います。

夫は『武夫はお前に一生苦勞をかけるだらう』と云ひ聞かせても『あれが生きてゐる中は家の息子ですわ……』と病身の身さへ顧みず、愛息懐かしの餘り武夫の破ら家へお峰を連れて出掛けて行く。

華子は妊娠した。歡喜に満ちた妻の言葉に對して夫の返事は餘りに哀しかった『少くとも三年は欲しくなかつたれ！』

吹雪の夜が来た、華子はまだ就寢せぬ夫の部屋を訪れた……時、夫の姿！傍の女はお春であつた。彼女は見るべからざるものを遂に見てしまつた。

華子は室外に逃れた、動悸する胸失神せるその姿、宛も該の如くであつた凡ゆる希望のこの破綻、凡ゆる愛情のこの欺瞞、この悲哀、この絶望——彼女はたゞ逃れたかつた。

夫は詫びた、併し彼女の心は救はれなかつた。お春も泣いて詫びた。姉妹のやうに慈しみ、信じてゐたお春は自分を裏切つた。華子は彼女を恨んだ、けれども可憐なお春の詫びる惨らしい姿を見た時『お前が弱かつたのだ、お前も私も女は皆な弱かつたのだ！』と慰めずにはゐられなかつた。

運命の悪戯を呪ひつゝ、華子は夫を許した、そして世の多くの女性が男性の罪と醜さを許して、人の子の母となる事が出たのであつた。愛見廣を唯一の望みとして心をこめて愛した。

時折實家を訪ねれば父は初孫の廣と噂々として戯れてくれ、露々たる和氣光の遊蕩亂行は人知れず彼女の胸を痛めてゐるのであつた。父から『友光は近頃悪い噂があるやうだが……』と云はれても『そんなでもありませんわ！』と答へて心では泣いてゐた。

思ひ餘つた彼女は夫を本當に樂しめる方法を——と母に訊いた時、母は『もう一人か二人の兒を生めばいいのだよ』と教へた。以外な母の返事は居並らぶ父や執事までを笑はせた。

小倉政義と井河菊子とはこの頃の一流社會に於ける最も交情濃かな仲として噂されてゐた。淫蕩不倫の友光はいつか妖艶なこの菊子と識り、單なる交際は日と經るに従つて淫卑と變つて來た。

丁度その頃安藤家に富子夫人を訪れた一刑事があつた。それは武夫が詐欺罪で捕縛された爲めであつた。けれども富子は武夫の罪を信じなかつた。

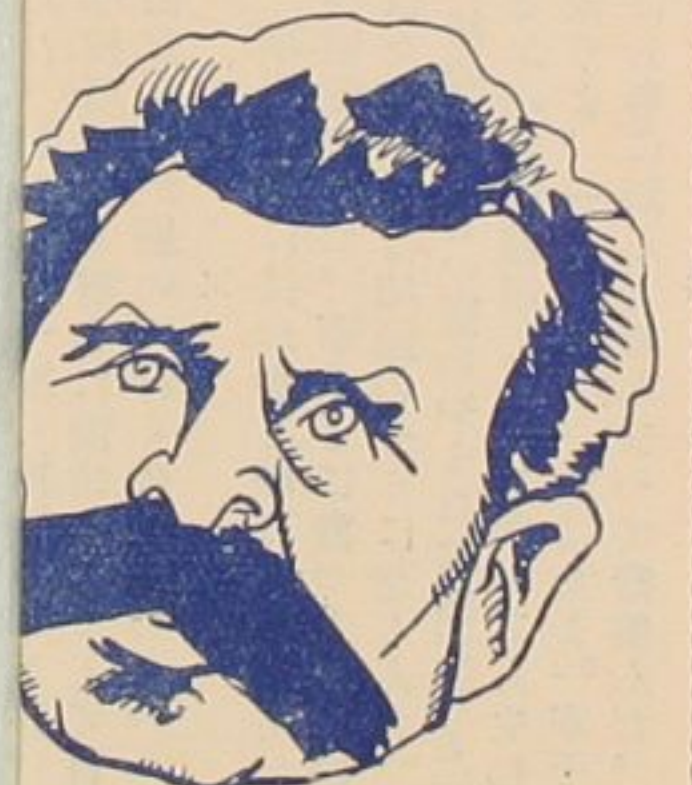
友光と情交深くなつた菊子は小倉に對して次第に冷かになつて來た。斯うして菊子が年甲斐もなく戀の戯れに日を過してゐる時、都下の新聞は『女流詩人井出菊子を繞る戀の貴族』と菊子等の亂行を報導したのであつた。その中には勿論友光の名も見られた。俊文は華子に友光の身の上を訊いたが彼女は父の前で少しも夫を恨むが如き事を云はず、唯だ『あの人が今までして來

榮ある人生の春を無情に踏みがちならながら、自ら誕生の意氣で生活する時、懐かしの母は危篤となつた。兄武夫が情婦あいなと共に病母の許へ訪れて來た時、母は生涯已れを苦しめた不肯兒の名を呼びつゝ、寂しく逝つた後であつた。

華子が兄の悔悟を涙ながらに迫つても、あいなに感涙してゐる兄の耳朶には何等の響きさへ與へず、兄は却つて不貞の言葉さへ殘して出て行つてしまつた。

お春がお峰に連れられて來た。身を恥ぢて何處へも嫁がず、その面には怪しい寒れさへ見えてゐた。その時、一通の電報は『友光變死』の悲報を齎らした。それは信じてゐた妻が友光との不倫に激怒した小倉が射殺したのであつた。

母の亡骸を送りつゝ、華子は愛見廣を堅く抱いて泣いた。



佛文豪モオパッサン(Henri Rene Albert Guy de Maupassant)は今から七十九年前(嘉永三年)生れた。父はロオレン系の貴族であつたが、彼の藝術的天才は實は純粹のノルマン人である母から享け繼いだものであり、事實この母に依つて育てられたときへ云はれてゐる。『女の一生』は彼が三十代の所謂創作時代の初期の作品で、彼の長篇中第一の物で露文豪で峻嚴な批評家のトルストイ翁さへ激賞した傑作である。彼より

スタゲオ通信

- ◆野村組 『道呂久博士』撮影中
- ◆池田組 『女の一生』撮影中
- ◆牛原組 『感激時代』撮影中
- ◆鳥津組 次回作品準備中
- ◆大久保組 『故郷の空』撮影中
- ◆清水組 『海に叫ぶ女』撮影中だが同時に讀賣新聞連載の『愛戀變相圖』に着手した
- ◆篤見組 次回作品準備中
- ◆重宗組 『不滅の愛』撮影中
- ◆五所組 次回作品準備中
- ◆齋藤組 『チンドン屋』撮影中その間に喜劇『果報は寝て待て』を完成した
- ◆佐々木組 次回作品準備中
- ◆小津組 同上

○此程の全回國者彼大会より事ある出席を以て御物
令を以て臨人の大令席上余を顧問に推すの
提議あり。和國為志協士評細提議の次第と余の
功績を陳べ湯場一段を以て可決す。趣趣御物
席上理するも其趣を以て令衆に告し余
より一席の挨拶を以てし。余は和國協士とせし前年
名譽令員に推薦せしを以て今現に特待を以て
つある。和國協士と帝大國者級長を解するも
人の協合ハ之れを顧問に推し以てかきし。此の
名譽特遇の望能くも余は之れを承けし。協
令員に於て一切名譽に對し之れが最高の名譽
待遇也

○野村先生村先生の並壽祝賀人々席上に於
て御物の挨拶極洋雅況に令員、此人は年位
尚若き者大本館の執事以て、余は昨年出版
したる隨筆、春愷二種の内、秋室田村先生
リ、之れを信物の刑務所に繋ぎかけたことを
叙しあるを以て、極洋の長年の新著として
曲を奏して紹介し、結果日記に於て拙著
を新撰するとのめくことと語り、余は甲午
亂年前に起訴し、牢屋に令員、頗る類
して改業を要するものと語り、更
る余は獄中の著書狀論に就てハ刑務署長
又特に請ふる技士の結果現存を確かめ得たり

と後つ比

四得十七の記

〇同夕の奥敷者の内法倣ひより一座の操人形
 が面白く思ひんぬ。面白く思ひぬの文楽を人形
 にも思ひて見てもあつたと思ふと式の異なりと思ふ
 形に之を倣ひて三尺五寸位より三尺寸位の間に
 此の世帯を思ひて人形師の思ひの上を思ひて
 んんか、此の思ひ幕の幅は七八尺位より一尺
 かの比。文楽の人形は人形の回支其の他躰の各所
 こ手かつけんと思ひぬ人形師の思ひ手も扱つし
 操人形師の思ひ手も扱つし紐を上へ吊しし
 思ひ手

の思ひ操人形師の思ひ手も扱つし
 んんか、此の思ひ幕の幅は七八尺位より一尺
 かの比。文楽の人形は人形の回支其の他躰の各所
 こ手かつけんと思ひぬ人形師の思ひ手も扱つし
 操人形師の思ひ手も扱つし紐を上へ吊しし
 思ひ手

〇

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

五第

十二行

